

## Sociology Beyond Borders

---

### 【取組概要】

本取組では、文学部人文社会科学の教育課程の中に「グローバル・ソシオロジー・プログラム」を設置し、日本社会のみならず、国際社会に対する問題意識を常に持ち（グローバル・マインド）、その解決のために誰とでもコミュニケーションする力（グローバル・コミュニケーション能力）を備え、国境を跨いで活躍できる人材を育成します。

本取組を通して、オープンで外向きのマインドを持った学生、海外でも臆することなく議論し意見交換できる能力を持つ学生、他国の現状と問題について自ら進んで学習し知識の幅を広げる学生を涵養します。

### 【取組実績】

本事業は平成 29 年度から 30 年度までの 2 年間にわたり、教育力向上特別予算のもと以下の取組を行った。また、平成 31 年度以降においても、文学部予算のもと継続して本プログラムを実施している（令和 2 年度は休講）。

### 教育媒体の設置：新授業、イベントの策定と効果

#### (1) 授業「グローバル・マインド」の新設：

学生が、物怖じせず外国人とコミュニケーションする際に必要なグローバル・マインドを涵養するため、前期に新授業「グローバル・マインド」を設置した。

#### (2) 授業「クロス・ボーダー社会学」の新設：

新授業を設置し、ポータルな種々の社会問題を主体的にプロジェクト形式で学習し、理解を深める機会を提供するために、後期に新授業「クロス・ボーダー社会学」を設置した。

#### (3) 国際会議での発表：

2018 年 3 月 9 日～10 日、上海大学にて開催の会議の中で、英語による研究発表を行った。また、2019 年 3 月 8 日～9 日、中央大学で開催された大規模な国際学会大会で、英語による研究発表を行った。参加した学生は、2018 年度は 6 つの調査グループ、2019 年度は 5 つの調査グループに分かれて発表を行い、すべて無事に研究発表と英語での質疑応答を終えることができた。

### 事業を支える組織制度の設置と活動の効果

#### (1) グローバル・ソシオロジー・プログラム (GSP) 事務局の設置と、HP の開設：

本プログラムの組織的中核である事務局を設置して、HP を開設した。

#### (2) 新しい教育手法開発のためアカデミックラウンジ、G スクエアとの連携：

外国人留学生とコミュニケーションをとる機会を、2018 年度には受講生一人につき 30 分×8 回（前期のみ）、2019 年度には 30 分×8 回（前期）と 30 分×6 回（後期）提供することができた。これは、グローバル・マインドの涵養に大いに役立った。

#### (3) 海外での情報収集活動：

2018年度は、近隣の有名大学である上海大学とソウル大学に赴き、社会学領域でのグローバル人材育成の動向を探った。2019年度には、欧州の有名なグローバル・プログラムの視察のため、デンマークのオーフス大学とロスキル大学を訪問し、その教育と研究の展開方法について学んだ。さらに世界各国のグローバル・スタディーズ・プログラムを持つ大学が一堂に会するコンソーシアムに参加した。

## 受講学生の能力の開発と効果

### (1) 英語コミュニケーション能力：

受講生の英語コミュニケーション能力は大きく伸びたと評価する。前期は、すべて英語で授業を行った。後期も英語を主たるインストラクション言語とするという目標は達成できた。(学生に日本語使用を許可したのは、課題別グループに別れてプロジェクトを進める際のみであり、それ以外は英語を使用していた)。授業を始めた当初は、英語での授業についていけない学生が散見されたが、本年度後期の後半になると、全ての学生が英語での授業がわかるまでになっている。これは、講師として授業をしてきたものの実感である。また、毎回の授業において、人前で英語にて発言をすることを奨励してきたが、文法的に不十分であってもなんとかコミュニケーションできるような能力と態度がついたと実感している。

### (2) 「グローバル・マインド」の涵養

外国人留学生と会話させることを課題として課すことで、積極性を伸ばすことができた。Brokenな英語でも物怖じせず会話を進める力、英語ではなくコミュニケーションすることの重要性を理解する力が格段についた。

### (3) ボーダレスな社会問題についての深い理解：

グループ内協働のもとボーダレスな社会問題のインタラクティブな学習(後期)は、2018年度は6つの調査研究グループ、2019年度は5つの調査研究グループすべてで非常に高い水準で完結することができた。さらに社会学的な視点から現地調査を課題として学生に課すことで予定した以上の実践的な学びと深い理解を学生に提供することができたと感じている。

### (4) 英語による学問的プレゼンテーションの作成と実施：

本プログラムの集大成である、海外の一流研究者に対して自分たちの研究成果を英語で発表し、質疑応答を経験するという目標に向け、受講たちはプレゼンテーションを作った。各グループとも、見事に英語での研究プレゼンテーションと質疑応答を達成できた。学問的な応答という観点からは、足りない部分はあるものの、彼らの成し遂げたことと、通常の研究会において日本語で発表を行う難易度と比較すると、本プログラムの学生が達成したことの大きさがよくわかる。

### (5) 海外有名研究者との意見交換・学問的対話：

プレゼンテーションの後、各グループに対してフロアーから英語で質問が来たが、なんとか伝えたいことを伝える努力をしていた。質問に的確に把握する力、また自分の意見をきちんと形成する力、即座に回答する頭の回転など、フロアーからの質問に適切に回答するには、幾つかの技術と能力が必要となる。上述したように、この点は、本プログラムの範囲内では、十分に学生をトレーニングすることができなかった点である。